青森県中津軽郡相馬村
字黒滝における祝言のあいさつ

渡辺修平

○はじめに

1．対象地の地理的環境：青森県の西南部に位置し、弘前市の中心からおよそ12kmほど西へ入った山間部にある。

2．対象地の社会的経済的環境：農業集落であるが、若年層はほとんどが弘前市その他へ通勤（会社員）したり、出稼ぎに出ている。

3．生業：主産業はリンゴ栽培で、その他に米、野菜などを作っている。冬期間は関東、近畿地方への出稼ぎ（季節労働）が多くなっている。

4．交通：バスが弘前駅前ターミナルから一日12本ほど相馬村役場付近まで通っている。

5．人口：82戸で、人口はおよそ400 名位である。大正時代は38戸で、戦後現在の戸数になり、ほぼ変化なしに続いている。

6．調査年月日：1990年11月16日　午後5 時30分～6 時20分

7．方言話者：山内石太郎　　明治42年12月生（81歳）
その他70歳代の男性に調査を行った。

8．調査者、調査場所：渡辺修平　　方言話者の自宅

9．調査方法：全て質問法によって行った。

Ⅰ．結納授受のあいさつ

1．仲人が新婦の家に結納を持参した時、座敷で、その家の主人（新婦の父親）に向かって、どのようなあいさつをしますか。

2．その家の主人（新婦の父親）は、仲人に応えて、どのようなあいさつをしますか。

3．その時の新婦のあいさつがあれば記してください。

1．　○キョーワ　ヒジョーニ　オメデタイヒデ　ユイノーオ　モッテ

アガリマシタノデ　マズモー　ウゲトッテ　クダサイ　→

（今日は　非常に　おめでたい日で　結納を持って　上がりましたので　何分　お受取りください）　　＜古＞　＜全年層＞　＜上品＞　＜かしこまり＞　＜上待遇＞　＜稀＞

※　これは非常に改まった言い方で、挨拶言葉として固定化されているようである。共通語の使用が目立つ。

2．　○ワダクシノ　ムスメワ　ナンモ　シラネンダハンデ　ヨグ　エンズケデ　ツカッテ　クダサイ

（私の　娘は　何も　しらないので　よく　教えて　使って　ください）　　＜古＞　＜全年層＞　＜上品＞　＜上待遇＞　＜かしこまり＞　＜稀＞

※　これも固定化されているようである。一人称代名詞は日常的には「ワ」であり、上記の例は共通語を使用した改まった言い方である。「ハンデ」は原因・理由を表し、「エンズケデ」は「言いつけて」のことである。

3．　新婦はお茶を運ぶだけで特にあいさつはしない。

Ⅱ．嫁をもらう家の人へのお祝いのあいさつ

1．嫁をもらうことが決まった家の人に道で出会って、近所の人たちはどのようなお祝いのあいさつをしますか。

2．嫁をもらう家の人は、そのあいさつに応えて、どのようなあいさつをしますか。

1．　○オメダデ　イー　ムスメッコ　ミツケタズナー　イガッタ　イガッタ　→

（あんたのところで　良い　娘を　見つけたってな　良かった　良かった）　　<新>　<全年層>　<中待遇>　<日常的>　<盛>

※　普通よく聞かれる言い方であり、自然な表現である。「ムスメッコ」の「コ」は、いわゆる指小辞の「コ」である。

2．　○アノ　ジニ　タノンダドコデ　イー　モノオ　サズカッタンダネナ

（あの　じいさんに　頼んだので　良い　ものを　授かったんだろうね）　　<古>　<老年層>　<中待遇>　<ていねい>　<稀>

※　これは相手の言葉を受けて、仲人に立った人をたてる言い方であり、普通はこのように返答するべきであったという。

Ⅲ．嫁に出すことが決まった家の人へのお祝いのあいさつ

1．嫁に出すことが決まった家の人に、近所の人たちはどのようなあいさつをしますか。

2．嫁に出す家の人は、そのあいさつに応えて、どのようなあいさつをしますか。

1．結納（ユイノータデ）終了後に近所の人たちがお祝いに来るので、その時に結納品（着物など）を見せるが、その時のあいさつ。

○アー　イードゴサ　オメーノ　ムスメッコ　ケダナニ／　ナニホド　イー　キモノバリ　キタバナ　→

（ああ　良いところへ　あんたの　娘を　くれたね／何とも　良い着物ばかり　来たもんだね）　　<古>　<老年層>　<中待遇>　<ほめ言葉>　<盛>

※　結納品の披露にともなう「ほめ言葉」である。結納の着物をほめることで、祝いの気持ちを表現する言い方である。

2．1に応えて：

○ナガダチ　イガッタハンデ　イードゴサ　イグーネ　ナッタネ

（仲人が　良かったから　良いところへ　行くように　なったよ）

<古>　<老年層>　<中待遇>　<盛>

※　これも仲人をたてた言い方である。「イグーネ」は「行けるように」というニュアンスもあり、仲人のおかげで、という形で応えている。

Ⅳ．結婚式当日のあいさつ

結婚式当日、結婚式に出席した人たちは（親戚以外）、どのようなあいさつをしますか。

1．新郎の父親にどのようなあいさつをしますか。

1-2 父親は、それに応えて、どのようなあいさつをしますか。

2．新婦の父親にどのようなあいさつをしますか。

2-2 父親は、それに応えて、どのようなあいさつをしますか。

※　1．2ともに、特にあいさつはしない。普通は新郎の家で、新郎側の親戚と新婦の父親だけを招いて式を挙げた。嫁側からは「ゲンジャ（ザ）」と呼ばれる、嫁の近親者四人あるいは六人が出席するが、これも決まったあいさつはなかった。仲人から式を始めるにあたって、次のようなあいさつがあった。

○～ムラノ　○○（名前）ト　～ムラノ　××（名前）ト　キョー

ケッコンシキダハンデ　イー　ヒダシ　ミンナ　コゴロヨグ　ノ

ンデ　クダサイ／　キョー　アサマデデモ　ノンデ　ニワガシテ

ケロデャ

（～村の　○○と　～村の××と　今日　結婚式だから　佳い日だし　皆　快く　飲んでください／今日　朝まででも　飲んで　楽しんで　祝ってくれや）　<古>　<老年層>　<上待遇>　<かしこまり>　<稀>

※　非常に改まった言い方で、共通語の使用が目立つ。後文は日常的な言い方になっていて、普通に人をもてなす場面での表現としても使われる。

V．結婚式後、姑が新婦を連れて近所へあいさつに回る時のあいさつ

1．結婚式後、姑が新婦を連れて、近所の家にあいさつをして回る時、姑はどのようなあいさつをしますか。

2．そのあいさつに応えて、近所の人はどのようなあいさつをしますか。

※　1．2とも、家によって、また「オーヤギ」（金持ち）であれば、あいさつ回りをしたようだが、一般的にはそのようなことは行わなかったので特定の言葉はない。

VI．嫁を迎えた家の人へのお祝いのあいさつ

1．10日ほど前に、長男（29歳）に嫁をもらった60歳代の父親へ、結婚式に招かれた50歳代の女性が、昼下がりの路上で、どのようなお祝いのあいさつをしますか。

2．父親は、それに応えて、どのようなあいさつをしますか。

1．　○ヤー　コノアイダ　オメダノ　シューゲンサ　イッテ　ゴッツォニ　ナッテ　キタジャ　→

（やあ　この間　あんたのところの　祝言に　行って　御馳走になってきましたよ）　　＜新＞　＜中年層＞　＜中待遇＞　＜ていねい＞　＜盛＞

※　年上の男性に対しての挨拶であるが、共通語の観点からは敬意がないと感じられる。しかし、このようなきちんとした挨拶をすること自体に、充分な敬意が含まれているという。

2．　○イヤー　ナンモ　ナンモ　サッド　ヤッテナ　オメダチニ　メーワグ　カゲタデァ

（いや　なにも　なにも　さっとやってね　あんたたちに　迷惑をかけたね）　　＜中、老年層＞　＜中待遇＞　＜上品＞　＜盛＞

※　やさしい、ねぎらいの言葉で、祝儀を貰ったことに対する感謝でもある。昔は二日間、家によっては三日間の祝宴を行ったところもあったという。

VI．結婚式後の仲人へのあいさつ

1．結婚式後、仲人の所へ新郎新婦（あるいは両親）がお礼に行った時、

どのようなあいさつをしますか。

2．仲人は、それに応えて、どのようなあいさつをしますか。

（新郎新婦が仲人の家に酒、反物を持って行って）

1．　○イー　ヨメッコ　ミツケデ　モラッタデァ／　アシ　ツカッタン

ダハンデ　コレデ　ナントカ　ガマンシテケロ　→

（良い　嫁　見つけて　もらいました／足　使ったんだから　これで　何とか　我慢してください）　　<古>　<老年層>

<中待遇>　<ていねい>　<稀>

※　結納に至るまで、形式的にでも「箱菓子」を数度手をつけずに返す風習があるので（箱菓子を受けとると結納承諾を意味することになる）、仲人は婚家に何度か足を運ばなければならず、そのことを慰労する言い方である。

2．　○アー　ナンデモ　フタリナガラ　ナガヨグ　ヤッテケロデァ

（ああ　なんでも　二人で　仲良く　やってくれや）　　<古>

<老年層>　<中待遇>　<ていねい>　<稀>

※　共通語を使用した多少改まった言い方で、ほぼ固定化している。

Ⅶ．嫁のはじめての里帰りのあいさつ

1．嫁がはじめて里帰りする時、嫁ぎ先の親に、どのようなあいさつをしますか。

2．両親は、それに応えて、どのようなあいさつをしますか。

1．　○キョーワ　ジッカノホーエ　イッテ　アイサツ　シテキマスノデ

ヨロシグ　→

（今日は　実家の方へ　行って　挨拶　して来ますので　よろしく）

<新>　<全年層>　<上品>　<上待遇>　<かしこまり>

<稀>

※　非常に改まった言い方で、嫁ぎ先の両親に対して気を使った表現。

2．　○ユックリ　イッテ　コイデァ／　ユックリ　イデ　オヤノ　カオ

コ　ミデコナガ
（ゆっくり　行って　こいや／ゆっくり　居て　親の　顔　見てきなさい）　<新>　<中、老年層>　<中待遇>　<ていねい>
<盛>

※　これは男親の応対で、女親は後文で「オヤノチコ（乳）飲ンデコナガ」という表現が、いささかの耶揄を込めて言われたという。

補説：

上記の会話例は、多少の表現及び発音上の違いはあるものの、弘前市内の場合とほぼ同じであるようだが、城下町という性格によって旧士族という生育階層との間には位相的な違いが見られる。以下に参考として挙げるが、方言話者から回答を得られたもののみに限りたい。

調査地：弘前市茂森新町
調査年月日：1990年11月10日　　午後6 時20分～7 時15分
方言話者：高坂はる江　　明治35年4 月生（88歳）
調査者、調査場所：渡辺修平　　方言話者の自宅
調査方法：全て質問法によって行った。

Ⅰ．結納授受のあいさつ
※　この場合は新婦が関与しないので、また自分達が仲人になった場合もあいさつは主人がしたので、話者はよくわからないとのことであった。

Ⅱ．嫁をもらう家の人へのお祝いのあいさつ
1．（近所の人たち）

○オヨメサンガ　キマッテ　ゴアンシン　ナサイマシタネ／　オメデタグテ　アッタネサ　ホントニ　ハヤグ　キマリナハッテ
（お嫁さんが　決まって　御安心なさいましたね／おめでたくてありましたねえ　本当に　早く　お決りになって）

※　他の階層に比べて共通語の使用が多く、より丁寧な言い方となっている。後文の「ネサ」は文末について、やさしく相手にいいかける表現で、現在では弘前市でもよく中、老年層の女性などに用いられる。

2．（嫁をもらう家の人）

○ミナサマノ　オカゲサマデ　アリマシタ
（皆様の　御陰様で　ありました）

※　これも丁寧な応答で、固定化されたものと考えられる。

Ⅲ．嫁に出すことが決まった家の人へのお祝いのあいさつ

1．（近所の人たち）

○ワイ　コノタビワ　××（名前）ガ　ヨメッコニ　ナッタッテネサ／　ホントニ　オメデトー　ゴザイマステスジャ
（まあ　この度は　××が　嫁になったそうですねえ／本当に　おめでとう　ございましたですね）

※　「ワイ」は、驚きを表す場合にも使われるが、この場合は文頭のあいさつとしての使用である。後文の文末「ステス」は「シテス」とも聞こえるが相手にさらにやさしく言いかける表現で、「ネサ」と併用される場合は「～ステスネサ」という形で使用される。

2．（嫁にだす家の人）

○ウンガ　イグ　オヨメサンニ　ナッテ　オガゲサマデアリマス
（運が良く　お嫁さんに　なって　御陰様であります）

※　これも丁寧な言い方であるが、話者に確めたところ、これよりも下の待遇表現はあまり知らないということであった。

Ⅳ．結婚式当日のあいさつ

※　当時はこのようなあいさつは男性によって行われたので、話者はよくわからないということであった。

Ⅴ．結婚式後、姑が新婦を連れて近所へあいさつに回る時のあいさつ

※　これも相馬村と同じく、家によってやったところもあったようだが、一

殺的には行われなかったのでわからないということであった。

Ⅵ．嫁を迎えた家の人へのお祝いのあいさつ

1．（式に招かれた女性→迎えた家の主人）

○コノアイダワ　イロイロ　オセワニ　ナリマシタ
（この間は　色々　お世話に　なりました）

（式に招かれた女性→迎えた家の妻）

○ナンボ　リッパナ　ゴシューゲンデ　アリシタ
（なんと　立派な　ご祝言で　ありました）

※　嫁を迎えた家の主人へのあいさつと、その妻に対するあいさつとは異なる。主人に対して嫁あるいは式の様子について言及はしないで、公的なあいさつのみとなる。妻に対しては同じく丁寧ではあるが、より私的なあいさつである。よその男性と親しく話すことは、はばかられたからであろう。

2．（迎えた家の人→式に招かれた女性）

○イエ　イエ　ドーイダシマシテ
（いえ　いえ　どう致しまして）

Ⅶ．結婚式後の仲人へのあいさつ

1．（新郎）→（仲人）

○イロイロ　オセワニ　ナリマシタ
（色々　お世話に　なりました）

※　当時は新郎のみがあいさつをしたものだという。

2．（仲人の女性）→（新婦）

○ヨグ　キタコド／　オガサマサ　ヨグ　ツカエヘーヤ
（良く　来たこと／お母様に　良く　仕えなさいよ）

※　後文の「へ」は相手に対する軽い命令の表現であるが、現在でもよく使

用されている。

Ⅶ．嫁のはじめての里帰りのあいさつ

1．（嫁）

○ホドゲサマサ　ミツコアゲニ　イッテキマス

（仏様に　水あげに　行って来ます）

※　里帰りは家によって帰る時期が異なっていたようで、　話者の場合は盆にはじめての里帰りをしたため、上記の表現となった。「サ」は方向、場所対象を表す。

2．（嫁ぎ先の親）

○イッテキヘ　コレモッテ　ミツコアゲテキヘ

（いっておいで　これ持って　水あげておいで）

※　「コレ」というのは土産などを手渡す場合で、それ以外は「キー　ツケデ」（気をつけて）という。

以上、位相的な相違を中心に挙げたのであるが、弘前市の旧士族出身の話者の場合は、相馬村の話者に比べて共通語の使用が多い表現となっている。そこには位相差として生育階層の別、男女差という要因が考えられよう。老年層であるにもかかわらず共通語使用の多いことが注目される。この話者について待遇程度を付さなかったのは、相馬村を比較の対象とすれば、ほぼ中、上待遇が多くなるが、旧士族階層の言語体系内部ではどのように位置付けられるべきかが不明だったからである。この様な地域社会内部での位相差を知る手がかりが、話者の高齢化によって急速に失われつつある現在、この種の調査の必要性が痛感される。

（弘前学院大学文学部日本文学科助教授）